

ポイント①「学習評価を教員の授業評価として捉える意識へ転換しよう！」

学習評価は、“生徒の学習の状況の評価したもの”であるが、「教員の指導の改善」の目的から考えるとき、学習評価は“教員の授業の運営を評価したもの”と考えることが適当である。例えば、学習評価の結果、「C」評価が多いとき、その評価を“生徒個々の学習の努力不足の結果”として完結してしまうと、教員の指導の改善にはつながらない。「C」評価が多い学習評価の結果を、“教員の授業運営に問題があった結果”と捉えることから、指導の改善のPDCAサイクルが動き出す。学習評価を授業評価の一つとして捉えることが必要である。



ポイント②「評価から指導の改善への流れをつかもう！」

評価（見取り、記録に残す評価）による生徒の学習状況から、教員の指導の問題点を明らかにすることによって、改善の課題を設定し、改善に向かうという指導改善の流れになる。



ポイント③「目標（ねらい）と評価規準を適切に設定しよう！」

目標（ねらい）や評価規準は、生徒が到達する状況として具体的かつ明確に示すことで適正な評価に繋がる。誤った例として、目標（ねらい）「～を考察することができるようにする」（評価規準「～を考察している」）の場合、“考察していれば”「B」評価になる。このように、到達する状況の焦点化が図られていない場合、適正な評価を欠く。



ポイント④「学習評価の妥当性や信頼性を確保しよう！」

記録に残す評価は、妥当性や信頼性を高めるために、組織的かつ計画的に取り組むことが大切である。（A）と判断される生徒についてはその理由等を記録に残したり、指導者間の評価規準のズレが生じないように、認識を共有したり単元の計画に適切に位置付けたりすることが求められる。また、記録に残す評価については、授業中に生徒全員を適切に評価することが難しいので、学習評価の妥当性や信頼性を確保する観点から、小テストや振り返りシートなど授業後に評価ができるように工夫することも考えられる。



『参考資料』補足説明

大分県教育センター
指導主事 渡邊 誠

ポイント⑤「生徒の学習改善を図ろう！」

学習評価の目的として教員の指導の改善とともに、生徒の学習の改善がある。特に、「努力を要する」状況(C)である生徒を把握し、その生徒には、学習改善や個別の指導が行うことが重要である。



ポイント⑥「授業の評価では効率的・効果的な方法を考えよう！」

記録に残す評価については、授業中に生徒一人ひとりに対して(A)(B)(C)の評価をすることは難しく、評価には工夫を要する。工夫の1つと例として、前述を踏まえて、まずは「努力を要する」状況(C)の生徒を優先的に把握して、次に学習の状況が質的な高まりや深まりをもっていると判断される「十分満足できる」状況(A)の生徒を把握し、評価が無印の生徒を(B)とするようなことが考えられる。



ポイント⑦「振り返りを充実させよう！」

振り返りの記述は、「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価する側面の1つであるとともに、振り返りを通して学習の成果だけでなく、学習の過程を振り返ることによって、次の学習の改善に繋がるものとして自己調整の大切な機能にもなる。よって、自身の学びを振り返り、学習の過程や自分の考えの変化がよく分かるように書くように具体的に記述の方向性を指導したり、記述することが苦手な生徒には個別に声をかけたり、具体的に記述できるようになるために継続的に振り返りの記述をさせたりするなど、教員の指導によって振り返りの充実が求められる。



ポイント⑧「生徒に示す目標と教師のねらいを一致させよう！」

生徒に示す目標と、教員が目指す本時の目標(ねらい)の方向性を合わせることが望ましい。これによって、生徒と教員が同じ目標を目指して取り組むことができる。また、評価においても、教員は目標に準じた評価規準で評価をする一方で、生徒も同じ方向性の目標に対して学習の成果と学習の過程を振り返って評価することで、この評価をもとに教員と生徒が単元目標の達成に向けて改善を図ることができる。

